[2] 次の文章は「干刈あがた」作「野菊とバイエル」の一部である。町と村が合併して市となり、主人公「ミツエ」たちが通っていた本町小学校（こっち）の一部の児童と、「君塚照子」たち村の小学校（むこう）の児童が一緒に通うことになった、第二小学校が四月からスタートしたが、それぞれの学校からの児童たちは七月になっても互いに打ち解けられずにいた。以下はそんなある日の様子からである。よく読み、後の各問いに答えなさい。

「今日は鉄棒をやる」

と橋本[注1]先生が言ったので、やっぱり体操の時間なんてなければいいのに、とミツエは思った。

準備体操のあと、ブランコより校舎寄りにある鉄棒のところへ行った。鉄棒は、中高低二本ずつ一続きのものと、六年生でも跳び上がらなければつかめない高さの独立したものが一本あった。男子のあとに女子で、背の順に一人ずつ鉄棒をする脇で、橋本先生が補助をした。尻上がりや足かけ上がりは、ミツエにもできた。

「つぎは逆上がり」

[1]ミツエは死にたくなった。列からすこし横に出て、先に逆上がりをしている男子から何か参考になることを見つけようと、一人一人の逆上がりをよく見た。逆上がりができる子は、なぜあんなに何でもないことのように、鉄棒に巻きついてしまえるのだろう、腕の力が強いのだろうか、蹴り上げ方が上手なのだろうか、と見ながら考えた。男子で一番痩せている高岡君は、巻きつけずに途中でほぐれてしまった。自分もああなるのだ、とミツエは思った。

男子が終り、女子で一番背の低いミツエの番になった。見たことも、考えたことも、もう何の役にも立たなかった。わかるのはただ、みんなが見ていることと、すぐ横に橋本先生がいることだけだった。ミツエは眼をつむるような気持で鉄棒をつかみ、足を振り上げた。先生が手でお尻を支えてくれたが、足はストンと落ちてしまった。

「もう一息だ」

と先生は言ってくれたが、やっぱりだめだった、と恥ずかしさを感じながら、男子たちの横にしゃがんだ。でも、とミツエは、今感じたものを、もう一度思い出してみた。鉄棒をしながら感じた感じは、する前に思っていたのと、すこし違っていた。前に逆上がりをしたときは、鉄棒が遠い感じで、腕に力が入らず、体がばらばらになってしまうような感じだった。でも今回は、そのときよりも、すこし鉄棒が自分の中心に近い感じで、体も前ほどばらばらではなかったような気がする。

女子も一とおり逆上がりを終えると、先生は時計を見て言った。

「今日は始業が遅れて、あまり時間がないが、あとの時間は逆上がりができない者のトックンをする。できた者はこっちに並んで、やはり逆上がりをする。できなかった者、こっちに並べ」

男子で逆上がりができなかったのは高岡君一人、女子はミツエと、松原里美と、一番背の高い二谷カヨ子の三人だった。四人ではすぐに順番がまわってくる。先生は「つぎ」と言う以外、何も言わずに一人一人のお尻に手を添えた。何度目かに、思いがけず里美がくるりと鉄棒のまわりに巻きついた。

「できたじゃないか！」と先生が言った。

「できた！」

と里美が、眼をまん丸くし、口も大きくあけて、空に叫ぶように言った。むこうの列から仲良しの木崎富子が飛んできて、二人で手を取り合って「できた、

できた」とピョンピョンはねた。

高岡君は途中で照れ臭そうに笑って、あきらめた顔になる。二谷カヨ子は鉛筆か割り箸のようにまっすぐな感じで、なかなか鉄棒に巻きつけない。ミツエは自分がどうなのかはわからなかった。三人とも逆上がりができないままに、終業の鐘が鳴った。授業がぜんぶ終ると、ミツエは掃除当番の関のぼるに「鉄棒のところで待ってる」と言って校庭へ走っていった。そしてランドセルを地面に置き、鉄棒をにぎった。さっきの体操の時間、[2]もうすこし鉄棒をやっていたいような気がしたのだ。そんなことは初めてだった。

ミツエが逆上がりの練習をしていると、大山澄子と根本千代がブランコのところに来てしゃがんだ。掃除当番の君塚照子と二谷カヨ子を待つらしい。

何度目かに足を蹴り上げたとき、ミツエは今までとまったく違う感じがして、頭の中が真白になった。何が起こったのかわからなかったが、眼帯をはずしたときのように、自分のまわりが破裂したような感じがした。自分のまわりの空気にヒビが入って、空気が割れたような感じがしたのだった。その真ん中に自分がいる。空がぐらぐら揺れて、大きな笑い声を出しているような気がした。

自分が笑っているのだ。自分は今、笑っている、と強く感じながら、ミツエは自分の中からこみ上げてくる笑いを声に出した。今まで笑ったことはなかった、という不思議な感じがした。

ミツエはもう一度、逆上がりをしてみた。やっぱりできた。そのことを、誰かに言いたかった。ブランコのところから、根本千代と大山澄子がこっちを見ていた。千代は口をぽかんとあけ、澄子は真剣な顔をしていた。ミツエは二人にむかって大声で、

「できた！」

と言った。すると、千代は澄子の方を見て、澄子は眼を伏せてしまった。

掃除当番が終った子たちが出てくるのが見えたので、ミツエは関のぼるに早く言おうと、[3]校庭をスキップしながらそっちへ行った。君塚照子と二谷カヨ子が並んで歩いてきた。［ア］ミツエは二人をやり過ごそうとした。［イ］すると、すれ違う一メートルほど手前のところで、君塚照子が突然、するどく切りつけるように何かを言った。［ウ］

「おき！」

とミツエの耳には聞こえた。［エ］照子が何か話しかけてくるなんて思ってもいなかったが、照子は立ち止まり、眼に力をこめるようにしてこっちを見ていた。［オ］それを見てミツエは、たしかに照子は自分に「おき」と言ったのだとわかった。

「え、何？」

とミツエは聞き返した。「おき」という言葉の意味がわからないので、聞き違いかもしれないと思ったのだ。光るような眼でこっちを見たまま、君塚照子は黙っていた。[4]あざ笑うような、突き刺すような眼だった。ミツエがもう一度聞き返そうとしたとき、照子は急に視線をそらして歩き出した。ミツエはわけがわからないまま、振り返って二人を見送った。

関のぼるやコッペがこっちにやって来た。ミツエは「おき」の意味を、今すぐ関のぼるたちに聞くことはできないような気がした。あざ笑うような眼から、「おき」というのがいい意味ではないらしいことは感じられた。

「逆上がり、できた」とミツエは言った。

「本当!? よかったなあ」
「見せてみな」
ミツエは鉄棒のところでやって見せた。関のぼるたちは拍手をしたが、ミツエはもう、里美と富子のようにピョンピョン跳ぶような気にはなれなかった。[4]
「おき」って何だろうと考えながら、関のぼるたちと一緒に帰った。
「おきって何だ？」
とミツエは、兄の良治に聞いてみた。
「知らねえ」と良治は言った。
向いのパーマ屋の久代にも聞いてみたが、久代も「知らねえ」と言った。
斉木先生は言葉の違いのことを言ったが、やっぱり「むこう」の子たちの言葉はすごく違うのかもしれない、それで「むこう」の子たちは「こっち」の子とあまり口をきかないのかもしれない、とミツエは思った。
翌朝、一緒に登校しながら久代が言った。
「おきっていうのひいきのことだと」
ひいきの意味なら、ミツエも知っている。先生にとくべつ可愛がられることを「ひいきされてる」と言ったり、不公平のことを「えこひいき」と言ったりするのだ。
「メカケのことも、おきって言うんだと」
と久代は、ませた口調で言った。パーマ屋にはいろいろなお客さんが来るし、久代の母親はそんなことも平気で言いそうだ。
「お前んちには先生たちがよく来るし、お前は野村先生にピアノを習ったりしてるから、そんなこと言われるんだんべ」
と久代が言ったので、ミツエはドキンとした。最初の日はもう行きたくないと思ったが、つぎの日曜日には、行ってもいいような気がした。そして、毎週日曜日に行っている。野村先生がいつも鍵盤をたたくように指を動かしているわけが、わかるような気がする。ミツエはピアノが好きだという気はしないが、指が鍵盤をなつかしがるような、くせになってしまうような感じがするのだ。
でも、ピアノを習っていることは誰にも言っていない。なぜ久代にわかってしまったのだろう。君塚照子は、おれが誰にひいきされているという意味で「おき」と言ったのだろう、と考えながらミツエは歩いた。照子は橋本先生を取られたくないと思っているようだから、橋本先生のことかもしれない。それであんなに眼を光らせたのかもしれない。もし橋本先生がおれをひいきにしていると言うのなら、とミツエは考えた。なんだか、[B]くすぐったいような感じがした。

【語注】
注1 橋本先生……元村の小学校から第二小学校へ来た六年生の担任の先生。4年生は体操だけを受け持っている。

問一　〜〜線部A・Bを説明したものとして最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

A　あざ笑う
① ばか笑いをする
② 大げさなほど笑う
③ ばかにして笑う
④ ほほ笑む
⑤ にこにこ笑う

B　くすぐったいような感じ
① じれったく、いらいらするような感じ
② 照れくさく、恥ずかしいような感じ
③ こそばゆく、むずむずする感じ
④ むずがゆく、不快な感じ
⑤ ぞわぞわと、背筋がする感じ

問二　本文中には次の一文が欠けている。それを補うのに適当な箇所を本文中の［ア］〜［オ］の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

ミツヱはびっくりして足を止めた。

① ［ア］　② ［イ］　③ ［ウ］　④ ［エ］　⑤ ［オ］

問三　——線部1のように「ミツヱ」が感じている理由を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 体操の時間は好きだけれど、鉄棒だけは苦手で男子達に逆上がりができないことを見られることが恥ずかしかったから。
② 体操の時間は好きだけれど、苦手な鉄棒の中でも今までできなかった逆上がりをみんなの前でしなければならないから。
③ ただでさえ体操の時間が嫌なのに、ほかの女子達に逆上がりができないことを見られることが恥ずかしかったから。
④ ただでさえ体操の時間が嫌なのに、苦手な鉄棒の中でも今までできなかった逆上がりをみんなの前でしなければならないから。

問四　——線部2のように「ミツヱ」が感じている理由を説明した次の文の空欄に補うのに適当な箇所を、本文中より三〇字で抜き出して、その最初と最後の五文字ずつを答えなさい。

「今回の体操の授業では、（　　30字　　）と感じたから。」

問五　——線部3のときの「ミツヱ」の心情を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 自分一人で逆上がりができるようになりとても機嫌がよくなり、橋本先生にそのことを早く伝えたいという気持ち。
② 自分一人で逆上がりができるようになりとても機嫌がよくなり、みんなにそのことを言って回りたいという気持ち。
③ 自分一人で逆上がりができるようになったのではないと感じ、応援してくれていた関のぼるたちに感謝している気持ち。
④ 自分一人で逆上がりができるようになったのではないと感じ、早く橋本先生に感謝を伝えたいという気持ち。

問六　——線部4のように「ミツヱ」が感じている理由を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 君塚照子から言われた「おき！」と言う言葉がいい意味ではないことだと感じて、逆上がりができたうれしさも冷めてしまったから。
② 光るような、突き刺すような眼で君塚照子が自分のことをにらんできた恐ろしさで、逆上がりができたことなどどこかへ行ってしまったから。
③ 関のぼるたちがやって来るのが思っていたよりずっと遅かったので、逆上がりができたうれしさも薄れ、気持ちも冷めてしまったから。
④ 関のぼるたちに逆上がりができるようになったことを伝えたところ、「見せてみな」とつっけんどんに言われ、うれしさが冷めてしまったから。

問七　本文中で「ミツヱ」はどのような人物として描かれているか。その説明として最も適当だと思われるものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 明るく元気であり、周りの子ども達からも信頼され好かれている人物。
② 明るく元気ではあるが、あまり物事を深く考えられない幼い人物。
③ 落ち着いた性格で、慎重になり過ぎてしまうことがある臆病な人物。
④ 落ち着いた性格で、少し引っ込み思案なところがあるおとなしい人物。
⑤ 落ち着いた性格で、何事にも慎重に取り組み、よく考えて行動する人物。

[3]の問題は次のページになります。